



プログラム冒頭、松原副学長から、開会のご挨拶とともに、留学体験発表に集まってくれた卒業生、在校生に謝意が伝えられました。



プログラムには、本学学生、交換留学生のほか、発表者以外の卒業生の懐かしい顔もちらほらみえ、教職員を含めて100名を超える方々が参加しました。



司会・ファシリテーターを務めたのは、トビタテ1期生で本年3月大学院人間科学研究所博士課程を修了し、本学で非常勤講師を務める長谷川将富さん(右)と、トビタテ6期生で今夏ニュージーランドの小学校でボランティア活動をしてきた、現代社会学科3年の中村奈南さん(左)。阿吽の呼吸で進行役を担いました。

第1部：講話

【キャリア】×【留学】～将来の為に「今」をどう過ごすか考える～



第1部は、(株)リクルートキャリア・リクナビ副編集長の小澤美佳さんによる講話。学生時代、「あなたの人生はつまらなさそう」という祖母の言葉に奮起しバックパッカーで海外へ。以後これまでに旅行した国は45カ国。キャリアとは単なる職業ではなく「人生そのもの」。行動することで自分の軸を磨く体験を学生時代に積み上げることの大切さを訴えられました。

第2部：リレートーク ～ 留学体験で何がどう変わったか？



↑第2部の最初は、カナダのランガラ大学へ留学中の佐藤勇佑さん(英米語学科3年)とライブ通話。LINEのビデオ通話機能で、現地の夜中0時を過ぎた時間帯、ホームステイ先の佐藤さんから、ライブでメッセージをもらいました。「留学前の不安は誰も同じ。不安以上に期待を高めてくれたのが、昨年秋の交換留学生との交流だった」と語ってくれました。ライブ終了時は、会場から、スクリーンに映る佐藤さんに向かって、「日本で待ってるぞ!」との友人の声と熱い拍手が送られました。



↑アメリカ・カリフォルニア州立大学フレズノ校の留学中の佐藤勝己さん(地域政策学科3年)。英語ができない、お金がない、と留学を諦めがちになる学生に力強いメッセージを司会の中村さんが代読。「何かを変えたい」と留学することを目標一念発起し、アルバイトでお金を貯めながら英語力を高める地道な取り組みで、諦めなければ夢は実現できると訴えました。



←卒業生トップバッターは、常磐大学高等学校で英語の非常勤講師を務める釜坂崇史さん(2017年英米語学科卒)。1年次夏休みアメリカ研修参加。2年次国際交流会館に同居しアメリカ人学生と共同生活。異文化を理解する苦労も体験しながら、3年次カナダへ交換留学制度で留学。今後またカナダへの留学を目指しながら、高校生に留学体験を語る機会を紹介しました。



←卒業生2番目は、神栖市立神栖第一中学校で英語教諭をしている大川瑞季さん(2017年英米語学科卒)。何事も悩んでいるよりやってみる!をモットーに、3年次カナダへ交換留学制度で留学。茨城県教員採用試験(中学・英語)に現役合格。カナダ留学中、多様な国々や文化を背景にもつ人々との出会いや生活での学びは、今、教師として、学校現場で多様な背景をもつ子どもたちへの接し方を考えたり、理解を深めたりする上で、とても役立っていると話しました。

遠くに高層ビル群を望み、眼下には高級外車が走るバンコク市内。留学前の東南アジアのイメージが覆され、実際に歩くことで視野が広がる体験も重要と語りました。



↑卒業生3人目は、県内の不動産会社に勤務する飯村達紀さん(2017年経営学科卒)。1年次国際交流会館へ入居。3年次に交換留学制度でタイへ留学。「留学によって得られたことは、とても人前で話すことなど考えられなかった自分が、自信を得てこうして堂々と大勢の聴衆を前にプレゼンができるほど、自分を変えられたこと。」「自分を変えたい人は是非留学を!」と、留学の意義を、軽やかに笑いを誘いながら語ってくれました。



↑在校生1人目は、渡辺凧沙さん(コミュニケーション学科4年、学校法人常盤大学内定)。1年次、中国語を履修したことをきっかけに春休みの台湾研修に参加。中国語で十分にコミュニケーションが取れる状況でなかったものの、現地プログラムでお世話になった大学院生や街中の人々が、根気よく自分の発話を待ってくれ、理解しようと歩み寄ってくれたことに感動。自分も、**他者理解のために自ら歩み寄る姿勢を大切にするようになった**、と短期研修での学びを丁寧に語ってくれました。



↑在校生3人目は、大内涼香さん(英米語学科4年、ディップ内定)。留学を考えながらなかなか踏み切れなかったとき、タイへの派遣留学を勧められて思い切って応募。留学先では、英語による授業を受けながら、タイ語にも敢えて挑戦し、読み書きをマスターしたことで世界の広がりを実感。「留学するまで自分に自信がもてずいけれど、**留学を通して自分の強みが強みとして認め、弱みが弱みとして改善を図る意識を得た**と語ります。東京で就活を展開し、第1志望のベンチャー企業に内定を得ました。



最後に、常盤大学非常勤講師を務めるトビタテ1期生・長谷川福子さんから、留学で得られる経験の意義が伝えられました。→
「信じる力」「つながる力」「楽しむ力」「振り返る力」「飛び込む力」←留学で得たこうした力は、即就活に役立つという視点を超えて、生涯のキャリアの土台を作ってくれると力説しました。



卒業生最後は、東京の外資系人材コンサルティング会社に勤めるトビタテ3期生の長山達見さん(2016年英米語学科卒)。2年次国際交流会館へ入居した際、同室となったアメリカ人交換留学生が、今、常盤大学専任職員となったジョーダンさん。日本語を教える面白さに目覚め、日本語教師を目指す計画でトビタテ3期に応募し採用。タイへの派遣留学後、ペルーの日本語学校でインターン。「**自分の軸はぶれてばかり**」と話しながらも、**留学体験が次のステージへの土台を上げてくれた**と留学の醍醐味を披露してくれました。



↑在校生2人目は、君島唯人さん(経営学科4年、株式会社サン・トラベル内定)。3年次春休みにフィリピン研修に参加。現地受入校となったバゴ市立大学学生が体学参加学生のチューターとして協力し、英会話練習のパートナーだけでなく、プロジェクト活動や日常生活もサポート。彼らの優しさや現地の子どもの笑顔に触れ、少しづつ耳慣れていたことで天狗になっていた自分が恥ずかしく思えた、と。「**もともと自分の中にあっただかも知らない“他者への恋愛の気持ち”がフィリピン研修でほぼはって来た**」と自分の中の気づきを語ってくれました。



↑在校生最後は、結成仁美さん(英米語学科4年、株式会社JALSカイン内定)。2年次に国際交流会館へ入居。交換留学生とも積極的に交流し、3年次にカナダ・ランガウ大学へ派遣留学。留学先で同じクラスになったベトナム人学生から、英語の発音が下手だと真向否定され、**その悔しさから英語の発音だけでなく、英語で自分の意見を明確に言い返せるほどに努力**。そうして身につけた発音力が発話にも活かされ、念願の航空会社グランドスタッフとして内定を得たエピソードを披露しました。



まとめ：トビタテ生からのメッセージ

←ビデオメッセージを寄せてくれたのは、トビタテ2期生の木下夏穂さん(2017年英米語学科卒)。3年次、トビタテ採用され、派遣留学を活用しタイへ留学。後半は、絵本プロジェクトを立ち上げ、山岳民族の子どものための教育支援ボランティアに携わりました。今、進路を転換して看護師を目指し、看護専門学校1年生。**留学を通して自分に向き合い、たどり着いた新たな夢に邁進しながら、トビタテで得たネットワークの力を紹介しました。**



↑ラインでメッセージを送ってくれたのは、タイに留学中のトビタテ7期生・仲村智里さん(ヒューマンサービス学科3年)。「何のための留学なのか、なぜ大学生であるかかえのない今の時間を、日本で楽しく過ごす時間を代えてまで行くのか、その気持ちを細かく、その上で**留学に挑戦したい、という気持ちがあるなら、その自分の気持ちを見遇ごさないで欲しい!**」という言葉が、会場の学生の心に沁みました。